

“I HAVE,, Knowledge Service International Symposium



Say about

“Technology and Value of Brand”

May 29th - June 1st, 2014
Jeju, Korea

Host



Marine Science Institute of Jeju Univ



ISIDOR SUSTAINABILITY RESEARCH RESEARCH INSTITUTE

Sponsor



MOTIE

beyond leading technology

KIAT



Jeju Special Self-Governing Province



JEJU NATIONAL UNIVERSITY



Jeju Fish-culture fisheries CO-OP

Toward The Pirates' View of Commercial
Transaction

INAGA Shigemi

International Research Center for Japanese Studies
Professor

交易の海賊史観にむけて：美術品交易を中心にして¹

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学

稲賀繁美

I 海賊を再定義する

1. 「バッタもん」騒動

「バッタもん騒動」から始めよう。2010年、神戸のファッション美術館に岡本光博氏の「バッタもん」シリーズが展示された。バッタもんとは、語源は定かでないが、関西では正規の流通経路を経ることなく販売される商品のことを指す。これにたいして「パッチもん」は偽造品、紛い物を指すらしい。バッタは日本語では同時に飛蝗のことも意味する。岡本氏はそれを利用して、ブランド品の皮革製品の皮をまとった殿様バッタを制作した。ところがこの展示にたいして、ルイ・ヴィトンから、偽造販売に該当するとのクレームがつき、展示が撤去されるという事件が発生した。タノ・タイガ氏は、ルイ・ヴィトンそっくりの文様を帯びたオリジナルのバッグを、こちらは木彫でこしらえたが、展示に際してはロゴ・マークを隠した、という²。冗談を解しようとしめないブランド代理店の頑なさ、失笑を買うかもしれない。本稿で問題にしたいのは、こうした事件の背景に横たわっている世界史の潮流である³。それを海賊史観と呼びたい。

今日、海賊、中国語では海盜といえ、例えばマラッカ海峡で航行する船舶を襲う輩や、ソマリア沖で同様に商船を襲って人質を取り、莫大な身代金を要求する職業集団のことが脳裏を過ぎる。これらの海賊は、国家の正規軍とは別の私兵に相当するが、それならホルムズ海峡閉鎖となると、どうだろうか。イランが国家の軍事行動として閉鎖措置を取れば、ペルシア湾奥の産油国からの原油の供給が妨げられる。これを阻止すべく、米合衆国海軍をはじめとする軍事行動が展開した。では海賊行為と、国家の軍事行動とは、どこで区別されるのだろうか。そして、ソマリア沖海賊やイランの行動を犯罪行為と決め付ける国際社会なるものの判断は、いったい何に根拠をおき、どのような理由から「正義」と看做されるのか⁴。

2 小さな海賊・大きな海賊

ここで唐突だが、画家ポール・ゴーガン（1848-1903）を取り上げよう。南太平洋のタヒチに移住したこの野生の画家は、はたして海賊だったのだろうか。かつての友人のカミーユ・ピサロは、こう悪態をついている。ゴーガンときては、ついこのあいだまでペルシア人や日本人からちよろまかしていたが、今や南太平洋で海賊行為を働いている、と⁵。ゴーガンのタヒチ風景は、実際にはエジプト・サッカラの墳墓の壁画のモチーフを流用し、日本の北斎漫画を借用し、さらには、南洋の小島にたたずむ女性の姿は、ボロ

¹本報告は、筆者が現在計画中の「文化翻訳の地殻変動、文化間葛藤の気象学・序説」の一部を構成する。Pirates' View of World Art History: beyond Oceanic View of Civilizations, Towards a Tectonics in Trans-cultural Transactions (TTT) & Climatology of Cultural Conflicts (CCC).

²福住康「民間企業による新たな検閲：ルイ・ヴィトンが引き起こした作品撤去事件」『あいだ』173号、2010年6月20日、p.9-18

³山田奨治『日本の著作権はなぜこんなに厳しいのか』人文書院、2011。巻末に著作権法の抜粋があるが、これを「正しく」解釈するには、著作権関係の訴訟で実務経験も豊富な弁護士解説が不可欠である。稲賀繁美「文化遺産としてのCMの保存と公開を考える」『思考の隅景』連載89回、『図書新聞』2773号、2006年5月6日付け。

⁴「海賊は共通の敵」（米中覇権の時代・連載第2回）『毎日新聞』2012年3月20日。ここで想起すべきは、ブルードンの『所有とは何か』（1840）。所有 *propriété* は財産をも意味する。同年ブルードンは『貧困の哲学』（1846）を執筆するが、そのマルクスによる意図的誤読が『哲学の貧困』である。追って本稿で「貧困」と「財産所有」が問題となるので、注記する。

⁵ Camille Pissarro, *Lettres à son fils Lucian*, Paris, Albain-Michel, 1950, p.318.

ブドウール遺跡の仏像の転用だったりする。80年代フェミニズムは画家を糾弾したが⁶、所詮ゴーガンは、西欧帝国主義の世界制覇による植民地支配の末端にあって、タヒチ社会に逃亡した、「小さな泥棒」に過ぎなかったはず。巨悪はといえば、そうした世界支配を築きあげた西欧の覇権そのものではなかったか⁷。

歴史を遡ろう。1494年といえば、クリストヴァル・コロンがアメリカ大陸を「発見」して2年後のことだが、トリデシリャス条約というものが締結される。これはスペインとポルトガルとで、なんと地球全体を山分けしようという、とてつもない海賊行為だった。東廻りはポルトガル、西廻りがスペインが大原則だったが、なにしろまだ新大陸とインドとの区別も不明なら、太平洋の存在も知られていない段階である。割譲すべき経度の混乱から、ブラジルは今日にいたるまで、ポルトガル語圏に属することとなる。そして実際にも抗争や諍いが頻発したのは、この地球割譲の分割線の近傍でのことだった。その一方がカリブ海域（1508）、ブラジル東岸（1521）、他方がマラッカ海峡（1505）、バタヴィア（1519）、香料諸島さらにはマニラ（1571）であった。思えば、近代の世界体系は、海賊行為が形作ったといって語弊ない。ポルトガルがインド西岸のゴアの占領するのは1511年のことだが、バスコ・ダ・ガマの航海にしても、まったく交易もない処女地の海に航路を開いたわけでは、まったくない。何世紀にもわたってアラビア商人のダウが行き交っていたアラビア海に、まさしく海賊そのものとして侵入したのが、ポルトガル人だった⁸。その末裔に、はたしてソマリア沖海賊を、人倫に悖るとして非難する権利など、あるのだろうか。

南欧が大航海に乗り出したのは、いうまでもなくインドそして東南アジアの資源と富を目指してのこと。そこには地中海がイスラーム圏によって支配されていた、という現実が立ちはだかつていった。スペインのグラナダが陥落したのは1492年、奇しくも「新大陸発見」の年だった。だが、スペイン半島をキリスト教徒たちが失地回復した「再征服」*reconquista* という表現は、それ以前に支配の実績がない以上、眉唾といわねばなるまい。さらに地中海における制海権をキリスト教連合国側が掌握するのは、それよりさらに90年後、レパント沖海戦（1571）でオスマン帝国に勝利を得てからのことに過ぎない⁹。

3. 世界制覇の野望

この時代、スペインとポルトガルの統一に乗じて、「日の沈まぬ帝国」の皇帝として君臨したのがフェリペ2世（1527-98）。そのかれとまったくの同時代人だったのが、豊臣秀吉（1537-98）だった。当時、スペインは台湾にまで進出し、台南にはゼーランディア城、北端の淡水にはサン・ドミンゴ城を築いていた。文禄（1592-3）・慶長（1597-8）の役＝壬申・丁酉の役で朝鮮に遠征した秀吉は、本来は大明帝国制覇の抱負を抱いており、その遠征の矛先は台湾にも向けられていた。世界帝国の野望を抱いた東西の覇者は、あわや台湾で衝突しかねない国際情勢にあったわけである。日本の軍事的統一者にそのような征服欲がきざした背景には、当時の明が、北方からの脅威に対する防御に追われていた、という現実もある。

秀吉のすぐ後には、伊達藩の支倉常長（1571-1622）が太平洋を横断し、アカプリコからメキシコをベラクルーズに抜け、そこから大西洋を越えて、欧州ではローマ教皇の拝謁を受ける。航海中に江戸幕府がいわゆる鎖国政策に転じたため、マニラで足止めされた常長一行が日本帰還を許されたのは出発後7年を経過した1620年のことだった。ここでも勘違いしてならないのは、なにも常長は前人未踏の航海に乗り

⁶ Abigail Solomon-Godeau, "Gone Native: Paul Gauguin and the Invention of Primitive Modernism," *Art in America*, 77, July 1989, pp.118-129.

⁷ Shigemi Inaga, «Tahiti et la migration des signes, Représentation du paradis terrestre chez Paul Gauguin et quête de la créolité dans le langage plastique au tournant des XIXe et XXe siècle», *Multiculturalisme et identité en littérature et en art*, L'Harmattan, 2002, pp.11-24.

⁸ 家島彦一『海が創る文明：インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、1993年、『海域からみた歴史：インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、2008年。

⁹ フェルナン・ブローデル『フェリペ二世時代の地中海と地中海時代』（1949）。日本語訳は『地中海』藤原書店。

出しのではないことだ。すでにポルトガルはマカオを 1557 年に占領していたが、これと対抗状況にあったスペインは、マニラを 1571 年に占領する。まもなくアカプリコとのガレオン船航路が開かれており、常長一行の旅程もその延長上に位置する。当時は東南アジアに日本人町の進出も著しく、あたかもそれと交差するように、オランダはまず 1613 年、平戸に商館を開き、1618 年にはジャワのバタヴィアに築城を開始する。1623 年には香料諸島の一角にあたるアンボイナで、出先機関の思惑の相違も作用して、イギリス人たちをオランダ側が虐殺するという凄惨な事件が発生する。そのおりに巻き添えを食って落命した日本人 20 名近くが存在が知られる。これも当時の交易と人的移動の規模を物語る逸話といっていよう。

4. 「近代以前」のアジアの海

それに先立つ世紀、永楽帝治下の明では、鄭和（1371-1434）による大遠征が 7 回によって企てられている（1405-1433）。日本語では「大遠征」と呼ばれるが、これは使節派遣の航海であり、色目人の出自の宦官であった鄭和は、最後の航海ではメッカ巡礼を果たしている。毎回 2 万 6 千人にのぼる人員を動員したと推定される壮大な企てだが、それもマラッカ海峡までは既存の中国商人の通商航路を伝い、インド洋からはアラビア人の水先案内に頼ったものだった¹⁰。海のシルクロードなどと呼ばれることもあるが、この航路が東西の物資交易の大動脈だったことは、例えばカイロ郊外のフスタート遺跡からも知られる。フスタートは大量の陶磁器片が出土することで著名だが、8 世紀から 17 世紀に至るその陶片のうち、15 近くが中国陶磁器であり、また現地での焼き物もその多くが、中国製品を模したものといわれる¹¹。

鄭和よりさらに 1 世紀先立つ元代には、『東方見聞録』の記載を信ずる限り、マルコ・ポーロ（1254-1324）が、元からの帰国に際して泉州からの海路を利用している。貿易風の風待ちのため 2 年を要する航海だったが、すでに立派な交易路が成立していたからこそ、ヴェネチア商人はこれを利用できた。その彼が帰国途上立ち寄ったバグダッドは、かつては百万の人口を誇ったが、1259 年にフラグにより陥落させられていた。クビライによる日本遠征は、文永（1274）、弘安（1281）の役、として知られるが、元はその後ジャワのシガンサリ王国をも攻略している（1292）。元寇の後、中国や朝鮮半島海岸は倭寇の被害を頻繁に受ける。これらのなかには、元寇のおりに動員された福建など出身者も多く含まれていたものと推定される¹²。東南アジア海域研究の泰斗、オリヴァー・ワルタースは、この海域における勢力の消長を曼荼羅に喩える仮説を提唱している。それぞれの地方王権の権威の消長に応じて、その勢力圏は膨張と縮小を繰り返し、そうした複数の勢力圏が並存し、ときに競合する磁場として、東南アジアの島嶼を把握しようとする仮説である。そこには恒久的に覇権を握り、制海権を主張するような権力形態は稀にしか登場しなかった¹³。

5. 「国際法」成立の背景

ここまで、欧州勢力が侵入する以前のアジアの海域の様子を足早に概観したところで、再度、視点を西洋世界に戻す。レバントの海戦に先立つ時期には、欧州の辺境に位置したキリスト教国は、むしろオスマン帝国からの恩恵に預かることに心を砕いていた。フランソワ 1 世（1494-1547）はメフメト 2 世

¹⁰ 宮崎正勝『鄭和の南海大遠征：永楽帝の世界秩序再編』中公新書 1371、1997 年、104-5 頁。ルイーズ・リヴァシーズ『中国が海を支配したとき』君野隆久訳、新書館、1996 年。

¹¹ 古典的な一般向きの著作として、三上次男『陶磁の道』岩波新書 724、1969 年。

¹² 田中健夫『東アジア通交件と国際認識』吉川弘文館、1997 年、第 1 部倭寇と東アジア通交圏。なお前期と後期に分けられる倭寇については、その人種構成についての学術論争には韓日の政治対立や侵略戦争史観をめぐる論争が投影されており、論者の政治的立場を捨象できないため、客観的な学術的解釈を導くことがきわめて困難な状況にある。秦野祐介「倭寇と海洋史観」『立命館大学人文科学研究紀要』81 号、2003 年など参照。

¹³ Oliver Wolters, *History, Culture, and Religion in Southeast Asian Perspective*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, 1982. 白石隆『海の帝国：アジアをどう考えるか』中公新書 1551、2001 年、46-47、209-210 頁。

(1494-1566) と同時代人だったが、前者は後者から、教典の民ゆえの恩恵としてキャピチュレーションの特権を得る。だがそれは、やがて欧米列強が力をつけるや、トルコ領土を蚕食する口実へと転用されることになる¹⁴。この手管は極東でも繰り返される。同様の特権を、領事裁判権などの名の外交特権として巧妙に活用することで、欧州列強は、ひろく東洋において、租界を築き、そこを拠点として、ゆくりなく植民地獲得を成し遂げてゆくからである¹⁵。それは合法の装いを凝らした海賊行為だった¹⁶。

ここで国際法という法思想の登場が問題となる。グロティウス (1583-1645) といえば、国際法の父と呼ばれるが、その『戦争の海と平和の海』(1625) は、あくまで英国との海上での覇権争いのなかで、きわめて現実主義的な配慮のもとに編み出された法理論だったはずだ。若きグロティウスの『自由海論』(1609) は、英国の海上覇権への異論として提起されており、それは後年になっても、ジョン・セルデンによる『封鎖海論』(1635) といった対抗言説との闘争を余儀なくされた。『戦争の海と平和の海』も、その背後には、シンガポール海峡でのオランダ側によるポルトガル船拿捕問題が発端に控えており、この訴訟に関して、グロティウスはスコットランドのウィリアム・ウェルウッドと論争を交える立場にあった。彼の法理論は、死後、ウェストファリア条約 (1648) の理論的基礎をなし、三十年戦争の惨禍に終止符をうつことに貢献したものとして評価された¹⁷。オランダの独立はこの条約をまって承認されたが、『戦争の海と平和の海』で、グロティウスは公海を規定し、公海における交戦権を国家主権の一部に組み込んだ¹⁸。

この裏にあったのはいかなる現実か。端的に言えば、無法状態に等しい私掠の横行にほかなるまい。スペイン＝ポルトガルの覇権を掘り崩したのはイギリスだが、そこでは、キャプテン・ドレイクに代表される、エリザベス女王陛下公認の私掠船の横行が、圧倒的な猛威を振るった¹⁹。そうした海賊行為を違法行為と規定するうえで、グロティウスの法理論がきわめて有効な枠組みを提供したのは、事実だろう。だがもしそうだとすれば、恐ろしく明確な事実がひとつ、あからさまになる。すなわち、国際法成立以前の西洋世界には、海賊行為を制限する恒久的な合法的枠組みなど、不在に等しかった、という実態である。

アンボyna事件の余波を受け、英国は香料諸島周辺海域からは手を引き、しばらくはインド経営に専心する。その英国が再び東方に触手を伸ばすのは、ラッフルズによるシンガポール占領 (1819) を待たねばならない。そのラッフルズが、マラッカ沿岸のスルタンたちを前にした演説の記録が伝わる。有名な言葉だが、貴殿らにとって海賊行為が恥ずべき営みでないのと同様、われわれ英国人にとって、交易はなんら恥ずべき行為ではない。したがって、イギリス主導の交易に協力して頂きたい、と、英国官吏は地元の「マレイ人」たちに要請したという²⁰。ここで何が発生したかは、すでに明らかだろう。いわばグロティウス

¹⁴ 松井真子「オスマン帝国の「条約の書」にみる最恵国条項」鈴木董 (編)『オスマン帝国史の諸相』山川出版社、2012 年、128-149 頁。なお 2012 年 4 月 9 日段階で参照した Wikipedia の Capitulations of the Ottoman Empire にかんする英文の記述は、オットマン帝国と西欧諸国との相互的關係について、極めて脆弱な情報であり、また本項に日本語記事は登録されていない。

¹⁵ 中国の朝貢制度に対する西側世界の誤解が絡む案件としては、英国王ジョージ 3 世の全権使節ジョージ・マッカートニーと清の乾隆帝との熱河における謁見 (1792) が有名だろう。明代より遅れる時期だが清代の朝貢関係に関する仮説は、濱下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』リブレポート、1991 年所収の濱下論文「中国の銀吸収力と朝貢貿易関係」に、この段階での図式が提示されている。なお欧米側からみた概説としては、Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, Yale University Press, 1988, 1993. アンソニー・リード『大航海時代の東南アジア』平野秀秋・田中優子訳、法政大学出版会、上巻 1997 年、下巻 2003 年。

¹⁶ 東洋文庫編『時空をこえる本の旅 2』に『東インド会社とアジアの海賊』2012 年という小冊子があるが、むしろ「東インド会社はアジアの海賊」と題すべきであろう。

¹⁷ 一般向きの教科書として、川勝平太『近代はアジアの海から』NHK 人間講座、1999 年、110 頁以下。

¹⁸ 太田義器『グロティウスの国際政治思想：主権国家秩序の形成』ミネルヴァ書房、2003 年など参照。

¹⁹ 櫻井正一郎『女王陛下は海賊だった：私掠で戦ったイギリス』ミネルヴァ書房、2012 年。

²⁰ 鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社、1981 年、95 頁。本書第 2 章「海に生きる人びと」の「海賊」と題する章には、海賊の実態とそれへの著者の眼差しが窺われ、参考になる。同じ逸話の国際政治学からの読解は、白石隆前掲書 93-102 頁。

仕込の国際法の枠組みによって、マラッカ海峡の海賊行為は、違法行為の烙印を押され、それとは入れ替わりに、交易のための制海権が正義にして合法と定義されたわけである。ラッフルズの偽善的正義感を支えたのが、ほかならぬウェストファリア条約以来の「国際法」だったといえ、あまりに皮肉だろうか。

II 世界史記述のさまざまな方法

6. ヴィネツィアと堺

ここで、川勝平太が提唱した文明の海洋史観を簡単に復習しておこう²¹。川勝は先行する梅棹忠夫の「文明の生態史観」に依拠しながらも、そこでは海路による通商が視野から欠落していることを指摘した。梅棹の理論は、ユーラシア大陸の中央を東西に分割する乾燥地帯を軸として、東西文明を四つの地域に分け、その両端に位置する西欧と日本とに、文明の生態学的遷移において並行現象が見られるとする仮説だった。半世紀後の今日から省みれば、この梅棹の理論にも、綻びは隠せまい。それは 60 年代の日本の驚異的経済成長を背景に、所謂近代化が成立したのは、旧大陸では西欧と日本だけ、という歴史的時点にたった同時代現象に、いささか無理やりに生態学的体裁の説明を加えたもの、と批判することもできよう。川勝の理論には、梅棹の生態学的仮想が人間による物流を完全に無視していた欠点を指摘し、その経路を加算して梅棹図式を補完した利点が認められる²²。両者には共通して当時まだ世界史大の有効性が信じられていたマルクス主義による資本主義の発展史観に対する対抗的反論という側面もあった²³。これに加えて、速水融が唱えた学説に、勤勉革命がある²⁴。イギリスを嚆矢とする西欧近代の工業革命 industrial revolution に対して、日本を典型とする極東には industrious revolution があつた、とする言葉遊びを含む対抗概念だが、速水はその実証的裏づけとして、人口比に対する農業生産量の増加率を統計的に計測する²⁵。

従来の学説では、西欧近代の「離陸」は、アフリカから南米への奴隷の輸出、南米や北米から欧州への砂糖や綿の輸出、そして西欧から綿織物や蒸留酒、武器の輸出という相補的三角貿易の展開によって担保された、と看做してきた。だがその裏面には、ペルーから欧州、あるいは日本から中国への、銀の大量の移動があつた。欧州や中国からの輸出超過の決済は、こうして流入した莫大な量の銀によって賄われた。

そのなかで、象徴的な役割を担った港町として、いささか恣意的な選択ではあるが、ヴェネチアと堺とを比較してみるのも一興だろうか。16 世紀末に南欧から日本に至った航海者の多くが、堺の繁栄ぶりを東洋のヴェネツィアと讃えている²⁶。いささか日本側に身最良な評価ともなろうが、資本集約的な金融の発達した欧州と、労働集約的な財の運用がなされた日本との対比を、このふたつの都市の命運に読み込むことは、けっして無理ではあるまい。19 世紀末の 1898 年に、そのヴェネチアでは、今日に続く藝術の祭典ヴェニス・ビエンナーレが幕を開ける。それから何年とおかず天心こと岡倉覚三はボストンで英文執筆した『茶の本』(1906)を刊行する。西洋世界の物質的繁栄に対して、東洋世界の精神性を、誇張を辞さずに対比させる『茶の本』は、堺が生んだ茶人、千利休の自刃で幕を閉じる²⁷。そこには金融資本主義とは対

²² 川勝平太『文明の海洋史観』中央公論社、1997 年。現時点で読み直すと、大胆だが議論がいかにも荒っぽい。

²³ マルクス主義の観念的な適用による世界史構想への反論として、日本における古典的な書籍には、宮崎市定『東洋の近世』1950 年、中公文庫版 1999 年。産業・交易史の立場からは川勝平太・濱下武志編『海と資本主義』東洋経済新報社、2003 年。

²⁴ Hayami Akira, "A Great Transformation' Social Economic Change in Sixteenth and Seventeenth Century Japan," *Bonner Zeitschrift für Japonologie*, Vol.8, 1986, pp.3-13. Jean de Vries, *The Industrious Revolution*, Cambridge University Press, 2006.

²⁵ 速水融『近世日本の経済社会』麗澤大学出版会、2003 年。

²⁶ そうした交易の実相と富の流入は、今に残る祭礼からも復元できる。鶴岡真弓(編)『京都異国遺産』平凡社、2007 年。

²⁷ Kakuzo Okakura, *The Book of Tea*, 1906; Dover edition, 1964, pp.64-5.

極をなす審美観を西洋社会に対して高らかに喧伝しようとする岡倉の、確固とした意志が貫徹されていた。

7. 正統と逸脱と

そのヴェネチア・ビエンナーレに、1986年にはイサム・ノグチがアメリカ合衆国代表として参加している。かれが展示したスライド・マントラと呼ばれる大理石の渦巻き型の滑り台は、彫刻作品として高い評価を得た。だが同時に彼が自信をもって出品した「光の彫刻」は、照明器具に過ぎず、デザインと美術の混同だとして酷評を浴び、そのためノグチは大賞を逃したとまで風評された。「光の彫刻」は岐阜提灯にヒントを得た、竹の骨組みに和紙を貼った空洞の造形だったが、この段階では、西洋における全うな「美術」としては評価に値しなかった。いわば絵画や彫刻は「美術」だが、日本起源の提灯では範疇外、とする価値判断が働いたものといってよい²⁸。欧州の美術ビエンナーレに相応しい展示品から、日本美学は疎外された。

同様の価値判断は、ごく最近でも繰り返し発現する。エル・アナツイはアフリカ在住の彫刻家として同じく21世紀になってヴェネチア・ビエンナーレに招待された作家だが、かれが2011年に日本で個展を開く段になって、ちょっとした諍いが発生した。展示場所として幾つかの美術館とともに、大阪の国立民族学博物館が選ばれたが、これに対して北米や西アフリカ在住の専門家から、猛烈な反対の声があがったのである²⁹。かつてはアフリカ原始美術を西欧ルネサンス美術と並べることなど論外、とする差別意識が存在したが、それが今ではひとつ横滑りして、アフリカ現代美術はあくまで美術館に展示すべきものであり、間違っても民族学博物館などに展示されてはならない、という教条へと摩り替わった、といってよい。

これとあい前後する時期のことだが、2008年には、パリで日本の民藝の大規模な展覧会が催されることとなった。だがその会場は、古典の殿堂ルーヴル美術館や、現代美術の聖堂たるポンピドー・センターではなく、アフリカやオセアニアの美術を中心に展示するパリのブランリー美術館となった³⁰。このことが公表されるや、日本民藝協会からは、当初、不満の声が漏らされた、との風評が伝えられた。かつて岡倉覚三は、西欧美術に対抗するがために茶道を唱道したが、いささか皮肉なことに、この茶道復興の衣鉢を継ぐ柳宗悦を創始者とする民藝協会が、今では、アフリカ・オセアニアの美術と同列に置かれることに難色を示したことになる。この民藝に連なる筋からは、第二次世界大戦下の日本の南方への進出の時期に『南方共栄圏の民藝』と題する書物も刊行されている。つまりこの段階では、民藝は東南アジアの民衆藝術をも自分たちの同類公と看做す価値観を貫いていたことになる³¹。それではいったいつから、民藝は非西欧の民俗とは袂を分かち、西洋美術に伍する展示場所を宛がわれるべく、出世を遂げようとしたのか。

8. ヘーゲル主義の転生

西洋の伝統を正統に位置づけ、非西洋を周縁に位置づける価値観は、西洋中心主義と名指される。その元凶をひとりの人物に集約するのは酷だろうが、しばしばその役割を負わされてきたのが、ドイツの哲学者、ヘーゲルである。世界精神の具現を欧州に見る価値観と、その時代精神に関する議論とは19世紀後半に世界的な影響力を発揮した。だがヘーゲルの欧州中心史観は、ひとり欧州にしか適用できないものではなかった。先に言及した岡倉天心がインドで上梓した英文の著作『東洋の理想』は、ヘーゲルの理論的

²⁸ ドウズ昌子『宿命の越境者イサム・ノグチ』講談社、2000年、文庫版2003年。

²⁹ 稲賀繁美「彫刻から廃品再生金属織物へ」『あいだ』178号、2010年11月20日。埼玉県立近代美術館『彫刻家エル・アナツイのアフリカ展 記念シンポジウム「異文化の表象と展示空間の政治学」報告書』2011年。

³⁰ *L'esprit Mingei au Japon, de l'artisanat populaire au design*, 30 sep. 2008-11 jan. 2009, Galerie Jardin, Musée Quai Branly.

³¹ 同様の認識への詩人タゴールの回想は、R. Tagore, "On Oriental Culture and Japanese Mission," address to the members of Indo-Japanese Association, Tokyo, 15 May, 1929. The passage is quoted and commented in Rostom Bharucha, *Another Asia*, Oxford University Press, 2006, p.170.

枠組みを応用して、東洋の美術の自己展開を、日本美術史の沿革のうちに読み込もうとする著作だった³²。さらにこの試みはアーネスト・ビンフィールド・ハベルの『インド美術の理想』に受け継がれ、また美術における汎インド主義を唱えた、スリランカ出身のアナンダ・クーマラスワミも、同様の論法によってインド美術のうちにインド的観念の具現を認めようとしている³³。ヘーゲル美学は、著者自身の思惑とは裏腹にも、近代アジアにおける国民主義や民族主義に思わぬ理論的裏打ちを提供していた、といつてよい。

はたして西洋史の流れを司る編年の枠組みと、東洋史のそれとは互換可能なものなのだろうか³⁴。この問題を検討するうえで、革命 *revolution* という言葉の東西比較は無意味ではなかろう。辞書学の国際的権威であるアラン・レイは『革命：ひとつの語彙の歴史』で、西洋の *revolution* は中国の易姓革命とは理念が異なるとの理由から、中国の語彙の検討を避けている。たしかに王朝の交代を天命に帰着させる思考法は、人民による在来権力転覆を図る政治行動の理念とは異質だろう。とはいえ中国の文化大革命が *révolution culturelle* と訳されてしまえば、両者は語彙の水準で互換可能な扱いを受けてしまう。フランス革命も、中国流の「革命」観にそって理解されることになるが、それを無碍に禁止するわけにもゆくまい。元紅衛兵で、中国文筆家協会会長となった陳建功は、文化大革命と並行して西欧世界や日本では学生叛乱が発生していたことを、30年後になって知り、革命運動の同時性にひどく驚いた、と告白している³⁵。

9. 時代錯誤と輪廻転生

偶発的な同時性は、その反対に機械的な編年による世界史の虚構性を浮き立たせる。イギリスのジョン・オナイアンスは、従来のヘーゲル主義的な欧州中心史観による世界美術史記述から脱却する企てとして『世界美術のアトラス』を編んでいる³⁶。だがこうした試みは、かえって世界美術史という枠組みの成立が、欧州自身による世界認識の進展と表裏一体に進行した過程でしかなかったことを、裏書してしまう³⁷。はやくも1987年には中国の黄永砅（ホアン・ヨンピン）が『中国絵画史』と『現代絵画簡史』を洗濯機で2分間攪拌した』と題するパルプの塊を、美術作品として展示している。朗世寧の世代に至るまで、ほとんど相互交渉もないままに進化した欧州絵画と中国絵画とを対比させつつ統合するには、このように洗濯機で両者を攪拌してターブラ・ラーサを実行するのが、一番手っ取り早い手段だったともいえようか³⁸。

そのうえで改めてヘーゲル主義が世界美術史構築のうえで、限定的な有効性を発揮していることを確認しておこう。19世紀以来の欧州美術史がいかに非欧州世界と交渉をもったか、簡潔に要約すると、そこにはフランス語綴りならば、東方趣味 *Orientalisme*、日本趣味 *Japonisme* さらに未開主義 *Primitivisme* の三段階を辿ることができる。東方趣味とは、西欧が自らの絵画の文法で東方世界を描写した段階、日本趣味とは他者の異質な審美眼によって西欧が自己表現を刷新した段階、そして未開主義とは、物理的に世界制覇を成し遂げた西洋世界が、アフリカの奥地やアジアの懷に未知の精神性を尋ねた段階といつてよい。

³² 岡倉の西側世界の学術への評価は、Kakuzo Okakura, *Collected English Writings*, Heibonsha, 1984, Vol.2, p. 132.

³³ 稲賀繁美「岡倉天心とインド」モダニズム研究会『モダニズムの越境 I: 越境する想像力』人文書院、2004年、80-86頁。

³⁴ Shigemi Inaga, "Is Art History Globalizable?" in James Elkins (ed.) *Is Art History Global?* Routledge, 2007, pp.249-279; 384-390.

³⁵ 「60年代の青年運動」『アジア遊学』42号、2002年7月。

³⁶ John Onians (ed.), *Atlas of World Art*, Laurence King Publishing, 2004; 『世界美術史アトラス』薩摩雅登・川野美也子訳、東洋書林、2008年。関連して参照すべき書籍には、David Summers, *Real Spaces, World Art History and the Rise of Western modernism*, Phaidon, 2003. Thomas DaCosta Kaufmann, *Toward a Geography of Art*, The University of Chicago Press, 2004. U.P.

³⁷ 西欧美術史学の中心がドイツ語圏から北米英語圏へと移動した実相については、Michael Ann Holly, *Panofsky and the Foundations of Art History*, Cornell University Press, 1984. Michael Ann Holly+Keith Moxey, *Art History, Aesthetics, Visual Studies*, Clark Studies in the Visual Arts, 2003. 学術パラダイムの地理的移動については、中山茂『歴史としての学問』中央公論社、1974年、新版1986年。

³⁸ ここで参考となる思弁としては、Terry Smith, *What is Contemporary Art*, Chicago, University of Chicago Press, 2009.

ドラクロワからファン・ゴッホを経て、パブロ・ピカソに至る系譜を思い描けば、理解も容易だろう。

そうした西洋世界の自己意識展開の現象学として構想された世界史は、その到達点において、時間錯誤 *anachronisme* すなわち時間軸のうえでの倒錯を経験する。端的な例はジョルジュ・バタイユに見て取れよう。ラスコーの洞窟に発見された人類最古の壁画は、人類の視覚経験を刷新する最新の事例として、バタイユにとっては極め付きの現代性を発揮する³⁹。最古のものが最新の価値を得る。起源が到達点を指し示す。この逆転をルネサンス美術における古代の生き残り、あるいはより正確に「死後の生」*Nachleben* として体験する狂気に憑かれた異端の学者としては、アビ・ヴァールブルクが知られる。彼によれば太古の美的体験は身体的な経験を介してルネサンスに亡霊のように蘇る。これを自覚的な方法論的アナクロニズムと定義したのは、フランスの美術史家、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンだが⁴⁰、この論法を仏教世界でさらに敷衍するならば、輪廻転生史観といった構想も不可能ではないだろう。もとより人は自分が誰の転生であるかを知ることはない。チャオブラヤ川のほとり、バンコク市内に位置する上座部仏教の暁の寺を舞台に『豊穰の月』を残した三島由紀夫の響にならうならば、転生する魂の遍歴としての世界美術史記述も、およそヘーゲルの精神現象学に比べて、より荒唐無稽な企てだとは断定できないことになる。

事実、オーストラリア大陸の先住民、アボリジナルたちの「藝術」は、始原の営みが現代の西洋的審美価値観によって復権されたという意味で⁴¹、ヘーゲルの精神現象学の末裔が最後に成し遂げた精神的次元での発見を証する事件と解釈してよいだろう。西洋起源の歴史的自己意識は、英国の海賊行為によって横領されたオーストラリア大陸のアボリジナル絵画に対する贖罪を代価に、領土的支配の対極をなす精神的世界を発見したのだから⁴²。先住民の先祖たちの魂は、この認知を通じて、現代に輪廻転生を果たしている。

III 現代の海賊的实践とその交易上の先蹤

10. 偽文字の政治学

以上確認したように、南欧から英蘭に至る西側世界の五百年にわたる海賊行為が、ヘーゲル主義的な世界史記述構想の下地をなす⁴³。その政治的地形図のうえで、西側世界の理念が正統と看做される一方、そこから排除される劣位の価値観に「海賊行為」の汚名が浴びせられるに至った。そしてこの不平等な価値意識は、いまや非西洋側の自己認識の内面深くにまで食い入って機能するに至っている⁴⁴。今日、例えば

³⁹ Georges Bataille, *Lascaux ou la naissance de l'art*, 1955. ジョルジュ・バタイユ『ラスコーの壁画』出口裕弘訳、二見書房、1975年。

⁴⁰ Georges Didi-Huberman, *L'image survivante, Histoire de l'art et temps des fantômes selon Aby Warburg*, Minuit, 2002. ディディ＝ユベルマン『残存するイメージ：アビ・ヴァールブルクによる美術史と幽霊たちの時間』竹内孝宏・水野千依訳、2005年。

⁴¹ Alain Rey, *Révolution, histoire d'un mot*, Gallimard, 1989. 稲賀による読解は、稲賀繁美「イメージはいかに生まれ、伝播し、体験されるのか」『図書新聞』2789号、2006年9月日付。および「イメージ解釈学の隠蔽に西欧20世紀文化史の犯罪を摘発する」『あいだ』128号、2006年8月20日、22-26頁。改題「ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン著『残存するイメージ アビ・ヴァールブルクによる美術史と幽霊たちの時間』を読む」『あいだ』132号、2006年12月20日、8-27頁。

⁴² Yawarra Kujju, *The Canning Stock Route*, National Museum of Australia, 2012.

⁴³ Adrian Tucker, "Spirituality is more than the awareness of one's self. It is the awareness of and responsibility for knowing your place and role in the world. It is about being aware of the interrelatedness of all that was, is and will be. It is about knowing your responsibilities for the past, present and future." Newtown, 1997. From the Panel at the National Museum of Australia, Sydney, 2012.

⁴⁴ 世界文学史を巡る議論で、参考になる論点として、Franco Moretti, *Atlas of European Novel, 1800-1900*, 1998; *Graphs, Maps, Trees: Abstract Models for a Literary History*, 2005. *Novel* (ed. by F.M.) in 2 vols, Princeton U.P., 2006. これらの思索に対する筆者の反論あるいは代替案として、稲賀繁美「地理学的想像力から地学的想像力へ：酒井直樹氏の講演「翻訳と地図作成術的想像力」を聴いて」『図書新聞』2879号、2008年7月26日付。また稲賀繁美「いま＜世界文学＞は可能か？：グローバルのなかで二十一世紀の比較文学の現在を問う」『比較文学研究』92号、2008年、104-121頁。とりわけ放浪の普遍主義への反論として、註15。

⁴⁴ 稲賀繁美「トポロジー空間のなかの21世紀世界美術史」(その4)『あいだ』148号、2008年5月20日。27-32頁。

世界美術と呼ばれる営為や、それを支える商業市場は、この二重構造のうえに巢食った空中楼阁である⁴⁵。

西洋絵画史と中国絵画史とが洗濯機による攪拌によってパルプ状に変性して以来、中国をはじめ東アジアの藝術家たちは、非西欧の市場から西欧正統の美術市場への参入を目指して、鎚を削ってきた⁴⁶。そこにはいかなる海賊行為の痕跡が残存し、海賊行為はそこでいかなる合法化の洗礼を経験したのだろうか。

徐冰（シュウ・ビン）は、偽文字を西側美術市場に輸出したことで著名な藝術家。偽文字というのも、彼自身が発明した独自の漢字が、かれの作品の上に繁茂しているからだ。近年、作者は自分の発明した漢字にも体系があり、きちんと学習すれば読解が可能だ、との主張をするようになった。ここには周到な作戦が織り込まれている⁴⁷。まず、徐冰がある意味で二枚舌を駆使していることを、見落としてはなるまい。一方で彼は、自分の出自である漢字文化圏の同胞に対して、かれの創作した漢字が偽文字でしかないことを、これ見よがしに誇示している。と同時に、彼が主要な標的とする欧米の観客や批評家たちは、彼の文字が偽文字だということを知識としては知っていても、その事実を識字の水準では認識する能力を欠いている。それらが読めない漢字だということを、彼らは読み取ることができないのだ。いわば徐冰は確信犯として偽札ないしは偽造海賊文書を、これは海賊文書ですよと宣言しながら見せびらかしている。そして偽札作りが社会的に成功を収める秘訣は、たんにそれが偽札であることを見抜けない対象だけではなく、それが偽札であること弁えている相手に対しても、有効な対策を講じているか否かにある。徐冰は、彼の漢字が偽文字であることを弁えている漢字文化圏出身者にも、自作を納得させるだけの工作を成し遂げた。

と同時に徐冰は、漢字という表意文字の原理を駆使して、自らの偽文字を増殖させている。部首を組み合わせることで意味を生産できる漢字は、基本語彙の合成によって複雑な体系を自らに内在する力学によって構築してゆく。その結果生まれた生産物が正統か、それともイカサマかは、体系内部の力学が判別することではない。それはあくまで外部の権力によって正統との認知を得られるか否かに掛かっている⁴⁸。思えば漢字文化圏が圧倒的な権威をもっていた時代、漢字文化圏の周辺地域に、いわば偽文字というべき表記法が捏造された。日本での仮名もしかり、韓国で発明された諺文もしかり。さらに女真文字や契丹文字などには、周辺文化圏の心理的劣勢複合が、不用意に複雑な文字体系の構築へと人々を駆り立てた形跡も濃厚だ。漢字文化圏と非漢字文化圏とに架橋し、一方から他方への越境を果たそうとした藝術家にとって、偽文字の発明は、けっして特異な逸脱行為ではない。偽文字文化の海賊論が要請される所以である⁴⁹。

11. 馬鈴薯型陶片の跳梁

おなじように偽文字から出発したもうひとりの藝術家に、倪海峰（ニー・ハイフェン）が知られる⁵⁰。かれは識別不明の絵文字で作ったネオン管の壁を「トロイの馬」と名づけたが、これは越境の比喩としても卓抜だろう。正体を偽って防衛線をまんまと突破する海賊行為が、かれのオランダ社会への参入と重ね

⁴⁵ こうした知的＝物理的な領土意識に裏打ちされたヘゲモニーに対して、「島嶼・群島」の比喩によって掘り崩しを図る議論として、今福竜太『群島・世界論』岩波書店、2008年。今福+吉増剛造『アーキペラゴ：群島としての世界へ』岩波書店。

⁴⁶ 美術品の認知における西側の価値観の優位については稲賀繁美「近代の国家コレクションと民間コレクションの形成：東洋/日本美術の収集・展示・露出とその逆説」『記号学研究』特集「コレクションの記号学」21号、2001年、75-101頁。

⁴⁷ 本件は、文化間翻訳における戦略問題として解明されるべき問題である。稲賀繁美「翻訳の距離と比較文学の前線」日本比較文学会編『越境する言の葉』彩流社、2011年、23-30頁。与那覇潤『翻訳の政治学：近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』岩波書店、2009年、とりわけ序論。与那覇の博士論文は、「海賊史観」と翻訳問題について示唆に富む。

⁴⁸ 日本の文化的認知とその西側世界の認識装置への依存性については、稲賀繁美「ロラン・バルトあるいは虚構としての日本」『表象としての日本』放送大学教育振興会、2004年、251-3頁。

⁴⁹ ⁴⁹ 稲賀繁美「ものぐるい、うつわまわし、まあい、あそび」モノ学・感覚価値研究会第2回アート分科会、2009年4月18日の講演。<http://homepage2.nifty.com/mono-gaku/> 参照。

⁵⁰ 倪海峰については Kitty Zijlman, *The Return of the Shreds: Ni Haifeng, Valiz*, 2008.

あわせになっている。呉須の青花模様を妻に頼んで自らの裸体に描いてもらった倪海峰は、この着脱可能というか、消去可能な刺青という偽装によって変身を遂げ、自らの出自を隠しつつ、同時に顕示する⁵¹。実際、コバルトの顔料は中国陶磁の代名詞であり、藝術家の中国出自を指し示す指標でもあったのだから。

ついで彼は、同じ模様を卵大の陶磁器の塊に塗布し始める。それはデルフト焼きの表情を喚起する点で、中国とオランダとの往時の交易を追憶させる。と同時にこの球体はジャガイモを陶磁器で模倣した代用品でもある。ジャガイモはジャガタイモとも言うが、それはジャカルタに由来する。南米原産の馬鈴薯は、遠路遥々ジャワ経由でオランダに運ばれ、いまではその食卓に不可欠な帰化植物となった。その経路を辿ることで、藝術家は、みずからのオランダ社会への編入を物語ってみせる。掌に巡らせることで愛玩できるその触覚性は、とかく視覚偏重となりがちな西洋美術への対抗でもあり、また文房四宝のひとつ、水滴をも想わせる形状は、非実用でなければ美術とはいえないとする、イマヌエル・カント以来の西洋美学に対して、控えめに反論を提起している⁵²。そして手の平に転がす玩具は、老人むけの健康器具としても、長寿のための実用的日用品として重宝されよう。およそ藝術品はかけがえのなさ、一品性が希少価値に結びつくが、と同時に人々は隣人が所有しているお宝に類似した代物を入手したがる。お互いに極めて類似しながら、ふたつと同一でない馬鈴薯の形状は、この矛盾した欲望を満たすうえでも好適だった。市民ひとりひとりが、一個の倪海峰作品を所有したとき、作者はいわばオランダ社会で市民権を獲得するが、それと同時に「倪海峰」は市民公認の商標 **trade mark** へと昇進を果たすことにもなる。実際近年では、倪海峰は呉須の文様を描き込んだ模造陶磁家具販売業者として、文字通りブランドになりおおせた⁵³。

12. 輸出用漆器の節操と海賊性

だが、はたしてこうした海賊商法は、現代に特有の現象なのだろうか。そう問うと念頭にのぼるのが、一方では中国陶磁器 **china** であり、他方は日本の輸出用漆器 **japan** だろう。陶磁器の流通に関する先行研究も示すように、景德鎮では伊万里の模造が焼かれ、有田からは景德鎮の偽物が輸出された⁵⁴。その虚虚実実の化かしあいこそ、陶磁器交易の実相があったことは、ロンドン大学付属博物館に寄贈されたパーシヴァル・デヴィッド卿のコレクションが雄弁に物語るとおりだ。蒔絵の世界に目を転ずれば、南蛮蒔絵が17世紀前後に紅毛蒔絵へと変貌を遂げることが知られる⁵⁵。ポルトガル人たちが聖書台や聖像の格納容器、あるいは蒲鉾型に螺鈿細工の象嵌が一面に施された櫃を所望したのに対して、かれらに取って代わったオランダ人たちは、平蒔絵で王朝風俗画が施された平面構造の函を好んだ。本来、日本特有にして真正なる蒔絵製品のはずだが、実際には顧客の趣味と需要に応じて、変幻自在な形態を帯びていた。

さらに、平戸商館長を勤めたカロンの手を経て手配されたと思しい豪華な贈答用の大きな函に注目しよう。ロンドンのV&A美術館所蔵の所謂『マザラン公爵家の櫃』という破格の寸法の箱などには、平蒔絵で王朝絵巻と思しき絵柄が精緻に施されている。だが今日の専門家が鑑定しても、それがどのような題材に取材した絵柄か、判別がつかない。おそらく事実はいえ、いかにも日本らしいが、実際には荒唐無

⁵¹ 刺青の文化史的周辺性の意味については Christine Guth, *Art, Tea, and Industry : Matsuda Takashi and the Mitsui Circle*, Princeton University Press, 1993. 宮下喜久朗『刺青とヌードの美術史』日本放送出版協会、2008年。

⁵² 物質感とその価値基準の相違については、モノ学・感覚価値研究会編『物気色モノケイロ』美学出版、2010年。

⁵³ 稲賀繁美「トポロジー空間のなかの21世紀美術史」(3)『あいだ』147号、2008年4月20参照。

⁵⁴ Angela Schottenhammer (ed.), *Trade and Transfer across the East Asian „Mediterranean“*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 2005. *East Asian Economic and Socio-cultural Studies* 東亞經濟與社會文化論叢. 343pp..

⁵⁵ 日高薫『異国の表象：近世輸出漆器の創造力』ブリュッケ、2008年、第2-3章。本書カバー写真にとられたヴィクトリア&アルバート美術館の蒔絵箱が、その典型である。またこれらの作品は『japan 蒔絵』展覧会(京都国立博物館、サントリイ美術館、2008-9年)に出品された。同図録の永島明子「japan 蒔絵-宮廷を飾る 東洋の燦めき」。

稽の絵柄を、蒔絵師たちが、輸出向けと知って造作したものらしい。いわば正統なる海賊版、あるいは海賊商法紛いのでっちあげの正統性が、ここに実現されている、とって語弊あるまい⁵⁶。一言でいえば、の徐冰や倪海峰のご先祖が、すでにここで活躍していて、ほかならぬ徐冰や倪海峰は、かれらの輪廻転生を遂げた姿に他ならなかったことになる。本論冒頭に戻るなら、バッタもんの元祖がここにあるわけだ。

さらに、ベルナール・ファン・リザンベールという伝説的な指物師の手になる横領行為に言及すべきだろう。かれは、もはや不明の秘策によって、輸出蒔絵の漆の表面を、基板から薄く引き剥がし、それをたくみにロココの曲面なす家具の表面に貼り付けた。この「皮膚移植手術」によって、時代遅れになりかけた輸出用漆器は、欧州の貴族や王族の館で、新たな生命を付与され、いわば「死後の生」を受けられて、見事な転生を遂げたというに相応しい。そうした輸出漆器の蒔絵たちは、自分たちの輪廻転生に不平をかこつこともない。それなのに、なぜグッチやフェンディやシャネルの商標をプリントされた皮革たちが、殿様飛蝗の形をした型に皮膚移植されることは、海賊行為として断罪されねばならないのだろうか。交易路を通じた商品の伝播と「変態」にこそ、歴史の真実を垣間見ることが許されるのではあるまいか。そしてここまでくれば、そうした歴史の実相を、海賊商法の名のもとに断罪しようとする覇権構造の由来も、いまやくっきりと、この500年間の人類世界史の眺望のなかに把握することができたのではなかろうか。

最後にひとこと、きわめて保守的にして体制迎合の蛇足を加えよう。海賊行為を成功裏に完遂するためには、なにが違法行為となるのか、遊戯の規則をあやまたず弁えておく必要がある。さもなければ、「ばったモン」の流通は、違法操業の海賊行為として摘発される憂き目にあう。それが交易の宿命なのだから⁵⁷。

⁵⁶ 稲賀繁美「隠喩としての漆蒔絵」『美術フォーラム 21』第19号、2009年、115-119頁。海賊行為と贋作の流通経路復元が、歴史復元に不可欠となる。

⁵⁷ 折から、日本敗戦後の原油輸入に先鞭をつけた出光興産の創業者、出光佐三についてのノンフィクション仕立ての小説が、巷で話題となっている。百田尚樹『海賊とよばれた男』講談社、2012年。「海賊」が事業成功者のあだ名として書籍の題名となる世相、実際にはCIAこそが現在の海賊に他ならぬこと、そしてこの主人公の「海賊行為」とはメジャーの市場覇権に割り込んで、結果的には合法的に日本の利権を確保したことにある点は、留意されるべきだろう。なお、ベン・ロベス『ネゴシエーター 人質救出への心理戦』が土屋 晃、近藤 隆文訳により、柏書房より2012年に翻訳出版されている。

*本稿は、台湾大学で2012年10月7日に行った筆者の講演を、求めの応じて要約した原稿である。徐興慶(編)『近代東アジアノアボリア』台湾大学出版中心、2014年、123-152頁に掲載されていることをお断りする。